

理学部は今

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>



平成12年度理学部教員集合写真（2000.12.19）

目

理学部の教育改革の現状	2
卒業生の言葉	3
学科・実験所ニュース	
数 学 科	4
物 理 学 科	4
化 学 科	4
生 物 学 科	4
地 質 学 科	5
自然環境科学科	5
附属臨海実験所	5
推薦入試実施状況	5
新任教職員の紹介	
化学科	古川 和広
物理学科	奥西 巧一
物理学科	立川 喜章

次

退官教職員の挨拶	
自然環境科学科	池田 泰治
自然環境科学科	石澤 進
自然環境科学科	高橋 利保
事務長	小池 靖夫
物理学科	清水 靖夫
物理学科	滝本 豊四
化学科	長谷川 拓也
外国人教員によるエッセイ	
地質科学科	Guang R. Shi
理学部での“職業教育”の試み	8
就職説明会と進学説明会を開催	8
これからの行事予定	8
編集後記	8

理学部の教育改革の現状

理学部教授 増田 芳男（学長特別補佐、評議員）

高等学校への進学率は97%に達し、多様化した生徒に対応するために、個性化や多様化を重視して高校の学習指導要領が平成15年度から改正されることになりました。一方、少子化に伴う18歳人口の減少で大学の進学率が上昇し、平成12年度には約50%に達しました。進学率の上昇はさらに進み、平成21年度には大学への入学希望者と入学定員の数がほぼ同数になることが予測されています。このことは、大学はもはやエリートの養成機関ではなく、大学進学への機会がだれにでも保証される段階、いわゆる大学教育がユニバーサル段階を迎えたことを意味しています。

進学率の上昇に伴って学生の多様化が進む中で、大学の教育機能を強化して教育の質を確保していくことが教育改革を進める上で、大きな課題となっています。

学生の動きにも大きな変化が見られるようになりました。例えば、理学部学生のここ数年の進路状況をみると、約50%が大学院に進み、残りが就職する傾向が見受けられます。しかし、その就職先も様変わりし、学部で学生達が学ぶ専門と職業との結び付きが弱まっているような傾向が眼につきます。この傾向は分野によっても違いますが、例えば、大学で物理を学んだからといって必ずしも物理に関係するような職には就かない例が多く見られるようになってきました。さらに、偏差値を拠り所に入学した学部や学科は必ずしも自分が考えていたものと違って戸惑い、転科（転部）を希望する学生が増える傾向が見られます。

このような状況に対応するためには、高度の専門教育は大学院で行なうことにして、学士課程の教育では狭い専門よりはむしろ広く基礎的な学力と教養的素養をきちんと身につけることがより現実的であると考えられます。そのため、各学科の壁を今少し低くして、学部全体でカリキュラムの枠組を考えると、コース制を取り入れる等の措置を検討すべき時期に来ているように思われます。

このような中、新潟大学では評議会において新潟大学としての教育研究の方向や、どのような人材を育成して社会に貢献していくかを審議して、「新潟大学の理念・目標」を決定し、公表しました（新潟大学学報第649号）。また、理学部でも理念・目標・施策を策定してホームページに公表し、さらにこれを具体化するために「学部における教育研究の中期目標と計画」を定めました。「教育の中期目標」の

骨子は、「学業と人格形成の両面に、自信と誇りを持てる人材の育成」とまとめることができます。

「教育の中期目標」を達成するためには、学士課程教育が目指す「到達基準」を明確にして、高等学校や大学院（修士課程）との接続にも配慮しながら教育課程を見直し、教育の質を確保するための授業形態や成績評価の在り方、学生の授業評価の導入、アドバイザー制などきめ細やかな学生の指導体制や学習環境の整備、進路（就職）支援体制の整備に加えて、点検・評価を教育改善に速やかに生かすためのシステムを作り上げなければなりません。また、中期目標の理念を学生の受け入れ方針や入試方法にも反映させる必要があります。

新潟大学理学部では、平成10年度に3回目の「自己点検・自己評価」を行い、その結果を学外の評価委員に客観的に評価していただく「外部評価」を実施しました。目下、この「外部評価」で指摘された事項を生かしながら「教育の中期目標」を具体化して教育改革を進めるために、「学部教育の再構築に向けて」をスローガンに掲げ、学部を挙げて取り組んでいるところです。

このような中で、文部省は平成10年10月の大学審議会答申を受けて、国立大学の教育研究の質的充実への取り組みを支援・促進するために、大学評価の実施を決定しました。そして、そのための第三者機関として「大学評価・学位授与機構」が設置されました。機構は、教育研究水準の向上を図るため、教育・研究活動等の評価を行い、その結果を広く社会に公表することを業務としています。

平成12年度の大学評価事業実施計画では、初年度の分野別教育・研究評価は理学及び医学の分野で、その分野ごとに6機関を対象に選んで実施することになりました。新潟大学理学部は、分野別教育評価の対象に指名され、評価を受けることになりました。

私達は、今回の「大学評価・学位授与機構」の評価を、上で述べましたような私達の日頃の教育改善の取り組みとその成果に対する理解を得るための絶好の機会と捕え、積極的に対応したいと考えています。

後援会員の皆様方には、このような私達を取り巻く状況にご理解いただくとともに、私達の努力にご支援をお願いする次第です。



卒業生の言葉

■卒業にあたって

倉繁 麻美 (数学科)



私は、自分が優秀な学生だったとは思いません。勉強も人並みでしたし、サークルでも人並みでした。ただ、一つだけ誇りに思っていることがあります。それは、気の合う愉快的な友人達に恵まれたことです。一人暮らし、完全選択授業、アルバイト。大学生活ではほとんどが初めての経験でした。当然、不安や悩みが多くありました。そのうえ、一人で解決できるほど私自身人間ができていなかったのも、苦しい日もありました。けれど、そんな時私の周りには、頼れる友人達がいました。一緒に泣いた友人もいれば、我を忘れて遊んだ友人もいます。厳しいテストを共に乗り越えた友人は数知れず。こんな仲間がいたから今の私があると正直にそう思えます。平凡な生活、一言で言うとそうなると思います。けれど、それこそが一番の喜びだと、私は思っています。

■卒業にあたって 田中 悠之 (自然環境科学科)

大学に入学して早や4年。ついに卒業を迎える時期になりました。大学生活を振り返って見ると、様々な出来事があり、それらを通して多くのことを学び、考えてきたと思います。自然環境科学科では幅広い知識を学ぶという主旨のもと、様々な実験・実習を行いました。徹夜したり、冬場暖房の切れた実験室で防寒着を着たまふ実験したことなど、今となってはいい思い出です。自然科学を幅広く学ぶ過程の中で、知識が増え、新しい発見もありました。その度、僕は得した気分になり、さらに物事を知りたいという欲求も出てきました。自分の持つ知的欲求や好奇心を満たすために学問をする、その過程を通して僕の人生は楽しくなると実感できます。卒業にあたり、自分の人生をより楽しいものにするため、これからも学び続けたいと思います。

■卒業生から

水澤 広美 (物理学科)



猛暑と極寒を存分に堪能できるこの地に住みついては4年。毎年夏は部活に励むため真っ黒に成り果てるのですが、20世紀最後の夏は少々趣が異なりました。院試の勉強で毎日学校に(クーラーを求め)出沒していたのです。今は無きお弁当館にも院試仲間とよく通いました。のり弁、コロッケ弁当のオンパレードです。そんな時折に、学科の先生方や事務の方にお会いすると、あたたかい言葉やアドバイス、体験談などをいただき、再びやる気をだしました。大学院に進んでも、もがきつつも必死になって乗り越えた日々を忘れずに、飽くなき探求心を持って自分の研究を頑張っていこうと思います。御指導宜しく申し上げます。

■卒業にあたって

杉浦 一幸 (化学科)



勉強、恋愛、サークル活動、アルバイトなど、学生が大学時代に経験できることはいくつかあります。しかし、そのすべてを完璧にこなすことは、時間的にも、そして体力的にも制約があるため、なかなか難しいことです。

人間は同時に三つ以上のことが出来ない、という人がいます。また、大学生には「卒業」というタイムリミットが存在します。そう言う意味で、学生時代にしか経験できないことは何なのか、またその中で自分にとって必要なもの、そして妥協してもよいものは何かを、早い時期から考えておくべきだった、と今ごろになって痛感しています。

この4年間はとても速く、まだまだやり足りないことがたくさんあって未練が残るのですが、いままで培ってきた大学での経験を少しでも生かせるように、これから頑張っていきたいと思います。

■卒業にあたって 岡沢 志樹 (地質科学科)

本当にあっという間の4年間でした。入学前に思い描いていたような大学生活とは少し違う、非常に忙しい毎日でした。



休みがあれば巡検に行き、休暇があれば調査があり、普段の生活ではレポートや発表準備と、常に何かに追われ続けていました。でも、辛いことばかりだったわけでは勿論ありません。この4年間のほとんどを共に過ごした学科の20数人の仲間達とは、忙しい生活だったからこそ、良い付き合いができたのではないかと思います。皆で行った巡検や調査だけでなく、徹夜の日々でさえ、今になると楽しい思い出です。一人でやっていたら辛かったろうことも、皆でやっていたから、楽しみながらこなせてきました。大学生活を、この学科の中で、この人たちと過ごせて本当に良かったと思います。

■大学生の自由と責任 佐藤 由紀子 (生物学科)

理学部生物学科に入学して4年間、私はずいぶんと自由な学生生活を送ってきたように思います。好きな授業を取り、都合に応じてコマを空け、平日遊びに行ったり、夜更かしして1限に遅れたり、放浪したりなど、自分のやりたいようにやってきました。大学では高校までの与えられたカリキュラムとは違い、授業や進路に関しては自分で選択することができます。しかし、そこには必ず責任というものに伴っていました。怠けたり楽をすることは簡単にできますが、後々の負担となって自分に返ってきます。私が大学で学んだことは、自分の行動に責任を持つことの大切さです。このことは、これから社会に出ていく上で、教訓として心に留めておきたいことの一つです。

□数 学 科

数学科講演会行われる

数学科では毎年、学生を対象に、数学科卒業生の中から講師をお願いして、卒業後の仕事の実際についての講演会を開催しています。今年度は、平成12年5月11日、新潟東工業高校教諭の竹内宏彰氏をお招きし、「教職に就いて」と題して教員の実状について興味深い講演をして頂きました。

高校への出前講義行われる

数学科では今年度より、高校生に数学の面白さや、大学の数学科の内容を知ってもらうため、本学科教員による、新潟県内の高校での出前講義を実施することにしました。今年度は、平成12年11月13日、吉原教授による、新発田高校で、「若き日の Gauss と数学」と題する大数学者 Gauss の数学発見のエピソードについての講義、平成12年11月24日、明石教授による、国際情報高校で「数学とコンピュータグラフィックスの関係」と題するフラクタルを話題とする講義を実施しました。

これらの事業には後援会から多くの補助を頂きました。有り難うございました。

□物理学科

セメスター制が今年度から導入された。8月第一週に試験が終わり9月末まで夏休みという日程である。講義中も暑さで集中力が散漫になり、試験も汗で答案をじっとりとぬらしながらの（とりわけ学生にとっては）悪戦苦闘であったらと思う。9月入学の布石としてのセメスター制ではなく、教育目標を達成するために有効であるかいなか問題とされるべきだと感じている。

4名の先生が県内の5高校に出向き、高校生に物理の話をした。理科離れという風評のなかで、意欲ある高校生を迎えて自然の奥に潜む謎解きに魅せられる若者を育てたいという願いをこめて始めた。これまで高校の現場についてあまりにも無頓着か無知でありすぎたのではないかと反省をしている。今後も工夫しながら継続していけたらと願う。後援会の援助による物理学科講演会が学外の講師をお招きして開催された。当物理学科の卒業生で現在新潟県教育委員会教育長として教育行政の重責にある野本憲雄氏は「教育改革」（11月7日）、高エネルギー加速器研究機構教授で大型ハドロン計画推進室長である永宮正治氏は「加速器が拓くこれからの科学」（12月19日）の話をされ、普段とは違った角度からのインパクトある講演と好評であった。

□化 学 科

8月には、古川和弘氏が名古屋大学理学部から生化学分野に助教授として着任した。10月には、自然科学研究科の赤阪健教授が研究テーマ“特異な構造と物性を持つ「かご状炭素物質」の開拓”で新潟日報賞を受賞したが、本年1月に筑波大学最先端学際領域研究センターに転出された。工学部が今年度10月に受け入れた韓国からの留学生5名の予備教育のうち「化学」を化学科が担当することになり、教員と大学院生が分担して、半年間にわたり高校の「化学」の教科書を用いて、講義と演習を行った。

推薦入試は今年度からセンター試験を利用しない形式になったため、昨年より早く11月末に実施され、化学科には18名の応募があり、小論文と面接による試験を受けた。12月にハワイで2000年環太平洋国際化学会議が開かれ、化学系の多くの教員が参加した。

新潟日報1月7日付け特集「にいがた21世紀—暮らしが変わる、時代を変える—」の中で、「あすへのテクノロジー：歴史を読みとる化学の光」として、橋本哲夫教授の研究業績が詳しく紹介された。

□生物学科

生物学科でも平成13年度入試から推薦入学試験が導入されることとなり、11月25日（土）、26日（日）の2日間に渡り、小論文と面接が行われました。3名の募集人員に対し、17名の志願者があり、全員が受験しました。今回の理学部推薦入試から大学入試センター試験は課されません。生物学科として初めての推薦試験でしたので、準備に相当な時間を費やし、また優秀な受験者が多かったために合格判定にもかなりの議論を行いました。結局6名を合格とし、12月20日（水）に発表が行われました。

当学科4年生の大嶋陽子さんが、学業人物ともに優れた女子学生に対して贈られる第51回奨学賞を（社）大学婦人協会新潟支部より受賞し、12月9日（土）、ホテル新潟にて贈呈式が行われました。

今年度から全学的にセメスター制度（1年を学期に分け、各学期の授業は各学期で完結させるシステム）が導入されましたが、生物学科でもこれに対応するために、13年度から4年生向け課題研究および演習を除く通年科目が全て半年科目に分割されました。これを機に2年計画で学科カリキュラムの改訂が始まります。

□地質科学科

3年生は夏休みの長期のフィールド調査、進級論文の発表・提出を無事終えました。4年生は卒論もたけなわで、調査や室内作業も進み、いよいよ最終盤です。今年度は就職状況が一段と厳しく、大学院進学と就職内定者の合計はまだ17名ほどで、就職活動の方策を教室としてもいろいろと検討しています。1、2年生も勉学や大学祭などに元気に取り組んでいるようです。

今年の夏は例年になく海外渡航する教員が多く、ブラジルには小林(巖)・赤井、フランスには高澤、イランには新川、中国には田沢、アメリカには松岡、そしてインド洋(モーリシャス)には宮下と、世界各地を飛び回っていました。10月にはオーストラリア・デーキン大学のシー先生が来春までの半年間、外国人教員として赴任しました。古生物学やアジアの地質などについて講義を行うとともに、田沢先生との共同研究に取り組んでいます。また、10月入学の大学院生として、インドネシア、オマーン、バングラデシュの留学生が加わり、教室はますます国際色豊かになってきました。12月以降も小林(巖)・立石教員はベトナムへ、宮下・高澤・松岡教員はオマーンへ、志村教員はオーストラリアと、相変わらずの海外渡航ラッシュが続いています。

□自然環境科学科

弥彦山頂にある新潟大学理学部実験施設は、超高層大気光観測所として建てられ、かつては高橋(利)教官が大気光(オーロラ)の観測に利用していました。施設周辺にテレビ塔が建設されてからは、大気光の観測は出来なくなりましたが、当時の雄姿は山頂展望レストラン3階の自然博物館に展示されています。その後、石澤教官が弥彦山城の植生調査に利用し、現在、この施設は弥彦山頂自然環境観測所と名称を替え、学科教官がこの地域の環境調査・計測に利用しています。

今年度からは、「弥彦山頂の実験施設を利用した、新潟県地域の自然環境調査・研究」の課題で、新潟大学プロジェクト研究を開始することが出来ました。プロジェクトは(1)国立環境研究所との共同研究による環日本海地域における酸性雨(雪)の発生源ならびに大気汚染物質輸送機構の解明、(2)新潟海岸の砂丘形成に対する季節風など環境要因コントロール因子としての弥彦山稜の地形・地質学的位置付け、(3)弥彦山塊の両生類に対する紫外線などの環境要因が生息状況に与える影響調査、の3つのテーマからなっています。今後も新潟県地域・弥彦山稜地域の特性を活かした自然環境科学の教育研究に努めてまいります。

附属臨海実験所ニュース



調査研究用ゴムボート「臨海II」を購入

臨海実験所では昨年11月に新たな調査研究用船舶として船外機付ゴムボートを購入しました。このボートはアキレス社製で、サイズは全長3.2m・幅1.5m・重量47kg(船外機を除く)、乗船定員は4名です。船外機はホンダの4サイクルエンジンで、最大出力は8PSです。なお、船名は「臨海II」と付けられました。ゴムボートですので持ち運びが容易であり、実験所から離れた場所での調査でも、車に積んで行けば気軽に使用することができます。また、船外機を付けなければ、手軽な手こぎボートとして利用できます。実験所では既に、佐渡島内加茂湖での環境ホルモン調査に活用しました。佐渡島内での調査・研究の際は、お気軽にご利用ください。

推薦入試実施状況

新しい制度による推薦入学試験

理学部ではさまざまな入試方法で多様な学生を募集していますが、平成13年度推薦入学試験は新しい制度で実施されました。主な変更点は、大学入試センター試験を免除すること、6学科全てが推薦入試を行うことです。選抜は面接、小論文、調査書により行いますが、人物をより重視する入学試験となっています。平成13年度推薦入試の実施状況は次の通りです。

学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
数学科	5	16	16	6
物理学科	5	2	2	2
化学科	5	18	18	7
生物学科	3	17	17	6
地質科学科	5	10	10	5
自然環境科学科	6	13	13	6
合 計	29名	76名	76名	32名

(理学部教務委員長 洞口高昭)

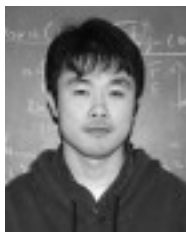
新任教職員の紹介

古川 和広 (化学科)



平成12年8月16日に助教授として赴任しました。有機物質化学大講座生化学分野で分子細胞化学の教育と研究にあたります。京都大学で医学博士を修得した後、これまで名古屋大学理学部生物学科で助手を努めて参りました。高等真核生物(動物細胞を中心に)の基本である細胞核を化学的に分解し、その構造と機能を理解する研究を行っております。静岡大学理学部生物出身で静岡より北で生活するのは初めてです。新潟市内で立つ市に出かけ海・山の新鮮な食材が多いことに驚いております。厳しい環境は良いものを育む証だと思えます。新潟大学では学生諸君とともに切磋琢磨し研究に多くの実りをもたらしたいと考えております。よろしく御願ひ致します。

奥西 巧一 (物理学科)



平成12年11月1日付けで、物理学科の助手として赴任してまいりました。生まれて以来ずっと大阪で、雪国での生活は初めてですので、冬にということが起こるのが、不安でもあり楽しみでもあります。大学院の頃から現在までは、量子スピン鎖に代表される低次元多体問題の理論的な取り扱いを主に行ってきました。特に、この10年弱の間に世界中に急速に広まった密度行列くりこみ群法と呼ばれる数値計算の方法を駆使して、これらの問題に取り組んでいます。多体問題は、固体物理の基本的なところから、蛋白質の折れたたみ問題、さらに数理物理的な問題にいたるまで幅広い関連性を持っています。新潟の皆様とも積極的にコミュニケーションを取りつつ、新しい物を築いていければと思っております。

立川 善章 (物理学科)



平成12年10月に技術職員として赴任しました。以前は原子核反応関係を専門としていました。「技術職員」とはいえ、いろいろの技術は先生方とは比べるべくもなく劣っていると思います。これから少しずつでも「技術」を身につけていきたいと思っています。先生方も、学生の皆様もよろしくお願い致します。



退官教職員の挨拶

退官に臨んで



自然環境科学科 池田 泰治

私は昭和38年に生物学科に赴任しました。翌39年6月16日、1時15分(3限)から始まる実習の準備を終えていた1時03分に猛烈な振動が襲ってきました。旧制新潟高等学校を引き継いだ西大畑の建物は木造平屋建ての細長い建物ですが、その廊下に飛び出して柱につかまりながらユッサユッサと揺れる廊下を見続けていました。その後、44年から45年にかけて統合移転に絡んだ大学紛争という大変な時期がありました。その45年に私は教養部に配置換えになり、理系、文系と異なる専門分野の先生方と一緒に、理学部とは異なった雰囲気の中で過ごしたことは良い経験でした。平成6年に教養部が廃止になり、理学部に戻り、自然環境科学科の一員として現在に至っています。この間、学生時代から手がけていた電子顕微鏡による葉緑体の構造解析、植物の生長に伴って起こる構造の変化など、終始葉緑体に注目した仕事をやってこれたことに幸せを感じています。これから益々厳しさを増していく社会に学生諸君が有為な人材として羽ばたって行かれることを祈っています。

退職にあたって



自然環境科学科 石澤 進

1954年に新潟大学農学部に入學して卒業後、大學に残り、途中理学部に移籍し、46年もの間、新潟に定着しながら何をしたかと問われても、答えは淋しい限りである。

農学部では、萩屋薫教授のもとで、ユキツバキの園芸利用に関する研究で指導を受けて野山を駆け巡る端緒となり、植物病理学の平田(天野)幸治教授の助言で、野生植物への興味を加速することになる。また、一時新潟大学の講師をされた池上義信先生に指導を受け、植物に関する記録を残す結果になる。その後、理学部の野田光蔵教授に理学部生物学科助手に招かれ、野山を駆け巡る機会が一層多くなり、現在にいたっている。

一方、大学で知り合った多くの友人との出会いがあり、新潟県の植物相の研究グループである「植物同好じねんじょの会」が発足し、現在でも活躍している。

大學での最大の幸せは、理解のある恩師と友人との出会いにあったと思っている。

退官にあたって

自然環境科学科 高橋 利保



夜光観測による超高層大気の研究を一貫したテーマとしてきました。最初の頃は弥彦山頂の観測所に観測装置を置き毎月2週間、観測員と一緒に泊まり込んでの観測でした。最大の思い出はA棟屋上より斎藤、木山両先生とともに低緯度オーロラの観測に成功し、国際学会で発表したことです。観測は色々な人たちの協力で出来たことでした。とりわけ観測員だった滝本さん、清水さん、家族的なムードでいつも暖かく受け入れて下さった物理学教室の皆さん、旧教養部物理学教室の皆さん、自然環境科学科の皆さんにはお礼を申し上げます。

研究室からは多数の学生が巣立ちそれぞれに活躍してくれています。最近でも自然環境科学科で育てた学生が南大東島という台風観測の第一線で活躍してくれていること等、次代を担う学生に恵まれうれしいかぎりです。今後は理学部の発展を静かに祈りたいと思っています。

退官にあたり

小池 靖夫（事務長）



昭和37年に新潟大学医学部附属病院に採用されて以来39年あまりの間、新潟大学の学内人事異動により、十数部局を経て最後の2年間に理学部に勤務させていただきました。

理学部では、事務長としての職務を通して、大学改革を推し進めなければならないこの重要な時期に、微力ではありましたが学部長さん始め皆様方と共に、激動の時代に向けた取り組みに参画し、多くのことを学び尊い経験をさせていただき大変お世話になりました。

国立大学を取り巻く状況は厳しいことが予想されますが、今後一層大学改革に取り組まれその激動を乗り越えて、活気と魅力に満ちた学風としての、理学部のさらなるご発展を期待しております。

退官に寄せて「弥彦と理学部との思い出」

清水 靖夫（物理学科技官）



昭和37年理学部物理学教室に勤めることになり、西大畑キャンパス時代を経て五十嵐キャンパスに移転後も、主に弥彦山頂と学部を基点に夜光観測をしてまいりました。国際地球観測年(IGY, 1957～)が新潟 N 37° 42' E 138° 49' (新潟128) でありました。その頃、諸先生方（(故)彦坂、斎藤、矢野、高橋、木山先生）の手厚い御指導のもとで、研究生、学生共々、相棒の滝本さんと30年近く一緒に微力ながら支えてきました。また教室の先生職員の方々に深く感謝するとともに今日まで健康で働かせてもらった事を有りがたく思います。皆々様の御活躍と御発展を心からお祈りいたします。

退官に寄せて

滝本 豊四（物理学科技官）



36年物理学教室に採用されてから、39年余り長いようで短い歳月が流れ1日1日と職場を離れる日が近づいてまいりました。先輩達に「もう退職なんですね」と言っていた自分がその立場になり一抹の淋しさを味わっています。20数年、夜光観測に明け暮れました。その後大学改革のあおりをくって超高層大気光観測所が廃止されてからは、フリーの仕事を、教官・同僚の皆様方のアドバイスなどを得ながら、今日まで何とか勤めさせていただきしました。これから大学も民営化に進む方向とのこと、それはさておき、理学部の益々の発展と皆様方の御健康を心より願って…本当に長い間ありがとうございました。

退官にあたって

長谷川 拓也（化学科技官）



理学部に就職して39年余りが過ぎ、3月末日をもって定年退官致します。この間何とか勤めを終えることが出来ましたことは、諸先生方はじめ職員皆様方の御援助のお陰と感謝致しております。ありがとうございました。

振り返ってみますと時代は大きく変わりました。モノクロからカラーへ、アナログからデジタルに、そして大量生産、大量消費、大量情報化の時代へと変革のスピードは一層加速しています。そうした中で「非効率」も時には必要ではないかと思ひます。

理学部もさらなる改革が求められていますが、バランスのとれた発展を心から祈念致します。

外国人教員によるエッセイ

My experience at and impressions of Niigata University

Guang R. Shi (Department of Geology)



The very name, Niigata University, was of course not new to me before my arrival in October 2000 – I have known this university, especially its Department of Geology, through the scientific literature. I was extremely lucky and honored to have been invited to visit this university as a Visiting Professor. I must say that the past 3.5 months have been the most relaxed time I ever had since commencing my teaching post back in Australia, because here I have no administration and little student interaction, and I spend most of my time concentrating on research, which is exactly what I enjoy most.

I have already had fond memories of the place, the people, the culture, and the snow. Back in Melbourne, Australia, where I come from, I have hardly seen any snow even in winter (that is, summer in Japan). So, I was overwhelmed on Christmas Day when, just after lunch, heavy snow started here in Niigata.

I would like to take this opportunity to express my greatest gratitude to the Faculty of Science and all the staff members of the Department of Geology for their collective hospitality, which really has made me feel at home. THANK YOU ALL!

理学部での“職業教育”の試み—インターンシップ—

学生の職業観形成促進を目的に、理学部では13年度からインターンシップ特別実習を共通科目として開設します。

本学部でのインターンシップへの取り組みは、11年度、自然環境科学科で「自然環境特別実習」が開設されたことに始まります。県内3博物館相当施設、2環境調査会社、1県立研究施設の計6事業所で10名の学生を受け入れて頂

きました。平成11年2月には、受入事業所の方々に加え、新潟県経済同友会の方も迎え、「学ぶことと働くことの狭間で考えること—インターンシップを巡って—」と題したシンポジウムを開き、試行の総括を行いました。事業所に少なからぬ迷惑をお掛けしたことは否めませんが、参加した学生にとっては貴重な体験となったようでした。平成12年度は自然環境科学科学生19名に加え、物理学科学生2名も参加し、また、受入事業所も環境調査会社が1つ増えて計7事業所で実施されています。

インターンシップは学生教育を目的としたものですが、同時に、この交流が、社会との接続を配慮した理学教育改革への刺激となり、従来やや狭かった理学部学生への社会的認知の幅を広げる機会となることも期待しています。

(濱口 哲 インターンシップ委員長)

就職説明会と進学説明会を開催 —3年生の意識の高揚に期待—

今年度も、「企業の採択状況と企業開拓」を目的として、平成12年12月12日～14日の3日間、関川・周藤の2人で8つの企業〔旭硝子(株)・三菱ガス化学(株)・住鉱コンサルタント(株)・クレハ化学工業(株)・中外テクノス(株)・小野薬品工業(株)・キャノン(株)・アルプス電気(株)〕を訪問しました。これらの企業のうちキャノン(株)は、これまで理学部の学生・院生の採用実績はあまりありませんでしたが、平成13年4月に理学部にも推薦依頼を送付してもらうことの約束を取り付けることができました。また、小野薬品工業(株)は企業説明会を開いてほしいという我々の希望を快く受け入れてくれました。こうしたいくつかの実績を踏まえて、主に3年生を対象にした、理学部主催の就職説明会を12月19日に開催しました。これには100名以上の3年生が参加しました。ついで12月22日には進学説明会を開催し、約80名の3年生が参加しました。また、小野薬品工業(株)の説明会は平成13年1月15日に実施されました。これらの催しが、就職や進学に対する3年生の意識の高揚に役立つことを期待しています。(関川浩永 新潟大学就職相談室員、周藤賢治 理学部就職委員長)

これからの行事予定(平成13年度前半)

4月5日(木)	入学式
4月9日(月)	ガイダンス
4月10日(火)	授業開始
5月下旬～6月初旬	黎明祭
7月上旬	第3年次編入学試験
8月上旬	理学部説明会
8月11日(土)	夏季休業
～9月30日(日)	
9月下旬	秋期卒業式

編集後記

本号では、理学部と大学院自然研が現在抱えている多くの課題を特集して、判りやすく解説して頂きました。「理学部は今」の発行も本5号で丸2年が経つことになります。4号から理学部ホームページにも掲載しました。学生、保護者、教職員の皆さんに少しは知られる存在になっていることを、編集委員一同期待しております。今後は教職員のみならず、学生や保護者の皆さんからの声や理学部に対する意見を掲載したいと考えておりますので、是非、ご意見をお寄せください。(郁)

広報委員：竹内(数学)、金子(物理学)、徳江(化学)、岩崎(生物学)、志村(地質科学)、石田(自然環境科学)